

花木の花本

○はな木の花の十分につきたるハ見事なる至極也。

されども花を十分につけおけば、次第に身木もひねて実もすくなくなりて枯枝多く出来て身木のいたミとなれば、見事なりし名木も見所なくなる。こと故に、をしけれども枝をとめ、つぼミをすかして、いつまでも見事なる花をめんどハすること也。

美服美食美宅は太平の世の有さまにて、誠に目出度けれども十分に奢らすれば、次第に財用困窮して、やがて飢餓する者も多くなり。家国の衰微となりて目出度かりし家国に奸民多くなり、付てハ刑戮もしげく、外聞実義ともに取失ふこと故に、明君賢相ハ是を憂へて制をたて、禁をまうけて奢をとどめ質素にたてかへして、いつまでも目出度家国をたもたんとハし給ふことなり。

花木の花をいつまでも見事にみんとて、枝をとめ
蒼をすかせば、一春二春ハ見ごとなる賞翫もならず。

され共一年二年の賞翫をこらへて、行末久しき春をたのしむハ、実に花木をすける人なり。

めでたき家国を幾久敷とりつづかせんとて、五年の節儉を守り、苦勞なる政をつとめて、

行末の安富を計り給ふハ、実に家国を大事に

保ち給ふ仁君なり。

花木のハなのさかりなるハ、去年今年の実生にあらず。実植よりとしをかさね春をつミて、花ハ盛に実もミのれる也。しかれば此はなを永くミんとて、枯枝をきり虫つきたる葉をつミ、延過たる

末枝をとめ、蒼過たる花をすかし、日除霜除をして根に土かひ、朝な夕なに心をつけて、身木のいたまぬやうにして、肥過て花のあせぬやうに実のよくとまるやうにと、如才なく世話をする
こと也。もし心得違へて一旦に枝をもぎとり、蒼をむしりとりて、土かふ手当ハなく切つめることとのミ心得れば、忽に枯木となり多年の賞翫もむなしくなること也。

目出度き家国の繁昌は、十年廿年の功業にハあらず、祖先開国の君、戦争の心をしづめ給ひて、

順従の氣に移さんとてハ、弓は袋にをさめ刀ハ
鞘にをさめてよろづしとやかなる風を賞し
給ひしより、数十百年を経て、ひとびとあらくれ
たる風義をやめ、おとなしきすがたとはなり
たる也。され共強氣ハ質朴にて、柔和ハ奢美に
流るるハ自然の勢なれば、今太平の人民富饒の
世に生長して、質素なるつとめハ何となく難儀
なるやうに思ふことハ道理なること也。しかれども此
富饒を久しくつづかせんとて、不孝不弟にて父母
の養ひを忘れ家業をすてて悪行をこととする
ものを取除、其俣に捨おけば不屈者にもなり
はづべきものをいましめ、似合ざる無益の芸能
を好みて、今日をむだに過す者をおさへ、美服
美食美宅をこととして、己が富饒なるを人に
おごり示す者を厳禁して、其上に孝弟礼讓
の道を教へ諭して、よき者ハ一人もふえ、悪き
ものハ一人も減るやうに心を用ひて、衣服の用
困窮に至らぬやうに、まめやかに世話をし給ふ
こと也。もし心得違て善を挙て不能を教ふる
化道のつとめをわすれ、俄に省減の法をのミ

やかましくたつれば、人心いとひうらミて、国風
荒衰し恩政のしるし見えぬうちに、先怨憤の
情を引出し、上もこり下もこりて、はてはては
ゆきなり次第になりゆくもの也。

病をうけて後俄に薬を用ひ灸をすうるハ、手
おくれなること也。しかし手をつかねて死を待よりハ
ましといふまでにて、養生の本意にあらず、実の
養生といふハ、先不断の心懸にて、口にうまけれ共
膏味を過ぎず、身ハ楽なれ共安逸をほしいままに
せず、よきほどに食、よきほどに運動して、氣血を

廻らし臟腑をすかし、病の出ぬやうにと申處
養生の専要なり。乱世の民ハ食乏しく瘦衰へて
うごきえぬ人の如し。其瘦て力なきハうちに
入るる食物の乏しきゆゑなれば、粥雑炊の類に
てもそろそろたべさせて養ひたつれば、次第
に肌肉もつき、色艶も直り、手足の力も出来て、
丈夫になりやすし。治世の民ハ食物すぎて、
肥ふとりたる人の得動かざるが如し。其ふとり
こえて氣おもく手足たるきハ、美食の過たる
故なり。さればとて幼年より美食美味をたべ

習うて、数十年に肥ふとりたる人を、俄に瀉下の薬を用ふれば、元気を損じて死に至る。さればとて外よりそぎへらすべき術もなし。うちへいるる食の多きとて断食をさすれば忽ち死す。せんかたもなき病氣也。この病人にハ先其利害をよくのみこませて、三碗の飯を二碗に減し、二汁五菜を一汁三菜に減し、うまく仕立る塩梅をいつとなくかるく仕立て、日々月々に用ひ習ひて、かるきものハ腹心よく、小食ハ気分のかるくなる道を自身と覚て運動すれば、身も健になるを覚るやうに教るより外ハなし。是を教化とハいふなり。孔子衛国に入給ひて、富さん教んとの給ひしは乱世の勢也。食物払底にて腹一杯も得たべず瘦つかれて居る人にハ、まづまづ粥にても雑炊にても快くたべさせてからの養生也。今餓死もすべき人に動き働きをすすむべきやうハなし。されバ富せて後に教んとハの給ひし也。只今太平式百年富栄えて衣食住にことかかぬ目出度御代の民ハ、たべふとりて気重になりたる病人なれば、此病人を療治する法ハ上に申如く、自分

と養生に心ざすやうにするより外ハなし。されば
教へて後に富すべき時節なり。金銀米穀にハ
ことかかぬ世中なれ共、奢侈の風さかんにて無益
の費かぎりなく、人々貧になりたるなれば、昔の
民ハなくて貧になりたる也。今の民ハ有余りて
貧になりたる也。されバ自身と養生を心懸さへ
すれば、外より食物を求るに及バず、食物を減
して丈夫もつくことにて、節儉を尊ぶ心になれば、
財用ハ自然と融通すること也。是をしへて後に富
する道也。聖人の詞を取直して今日の用に

立ることハ、恐多きことのやうなれども、是則時と
勢とをしる道にて、実に聖学の極意也。貧病ハ
治し安く、富病ハ治し難し。乱世の民ハ養ひ
やすく、治世の民ハ養ひがたし。扱又養生にし
おきの養生といふことはなし。たとへバ昨日炙を
すゑおきたる故に、今日不養生をしてもよく、
今日薬を飲おくハ明日大食すべき為といふやう
なるハよに愚なること也。今日も明日も飲も食も
気をつけて身の働も慎ミ、けふも慎ミあすも
慎ミて、九十歳百歳の寿命を保つ、是養生の

極意なり。家国の政も又然り。今日よく世話を致し置たれば、是にて五年十年ハ世話をやくに及ばぬといふ道ハなし。政の道ハ元朝より大晦日迄、一日ひとつとめて、ぬけめ油断のなきやうにまめやかに世話をすること也。故に賢人君子ハ夙夜不懈一人につかうまつりて始終かはらぬを忠といふ。世話する人がなくなれば又よき世話人を代りに立て、とかく善政の絶ぬやうにと心を尽し給ふハ仁君の道也。家国の興衰ハ常といふことハなく、上の世話よくとどけば栄え、世話不沙汰なれば衰ふ。

禹湯文武の聖王にても、子孫愚にして怠たれば、ありがたかりし政もすたれはてし事、歴然たること也。

乱世久しく続きやうやく治りたるはじめハ、世界一統に財用不足して、貧につまりてハ飢餓に至るものも多きなり。太平久しき御代ハ世界一統に財用も満足して、富饒に余りて奢侈長過し、夫故に飢餓に至る者多し。されバ乱世の民ハ貧にせまりて苦ミ、太平の民ハ富に余りて苦む。貧より貧になりたる民ハ救ひ恵ミ安し。富より貧に成たる

民ハ救ひ恵みがたし。たとへバ蔬食乏しく食つけたる人の腹のへりたるハ、湯漬食に塩菜にても佳肴珍美におなじくうまけれども、美食沢山に食つけたる人の腹のへりたるハ、一汁二菜の料理にてハ、さのミ食たるやうにも思はぬは、人情の常也。故に古語にも凍たるものハ衣をなしやすく、飢たるものハ食をなしやすしなどいへる也。乱世に貧窮を救ふ道にてハ治世の富餓ハすくひ難し。乱世の民ハ食にうゑて瘦勞れ動きえぬ病人なり。治世の民ハ大食してふとり過ぎ立居のならぬ病人也。病ミて得動かぬ處ハ同症と見ゆれども、病因ハ雲泥の違ひなり。

奢侈になりたる民ハ病人也。支配する役人ハ医者なり。病にハ内傷外感其病さまざま也。是を療治する医者ハ望聞問切さまざまの功者あることなり。まづ望といふハ病人の顔色容貌に心をつけてとくと見察すること也。聞といふハ病人のものごし音声に心をつけて得と聞察することなり。問といふハ病のおこり次第を得と問ひしることなり。

切といふハ脈をとり腹をおしてしつかりと心に見切を定ること也。この望聞問切ハ何れの医者もすることなれども、病人に深切なる医者ハ、げにげに病人の苦痛を我身の苦痛の如く、眞実心より平癒いたさせたく思ふ處より、匙加減もとりつ置つ思案工夫をこらして、一日に一度見まはる所へ二度も三度も立廻り、薬の加減に油断をせぬは、是上手にてたのもしき医者也。役目一通りに脈を見、思ひ付次第に薬をもり、治不治ハ病人の運命次第と、二日おき三日おきにちらちらと見まうて、療治油断なる医者ハ、誠にたのもしげなき下手医者也。上手にかかれば癒る病氣も、下手にかかれバ怪我するは歴然たること也。故に子どもら病氣といへば、其親かならず良医をたづねもとめて薬を用ひ、かならず下手医者にハかけぬものなり。君ハ父母なり民ハ子也。如才なる役人に預けて難義をさすること、仁君の甚おそれ給ふ所なり。

よき役人と申ハ深切なる医者の病人の死生を身に引受て、療治に心を尽すがごとく、民の

苦樂を身に引受て、昼夜世話をまめやかに
する人を良吏とはいふなり。医者深切なれば
食をくひかけ、眠き目をこすりても、匙よ薬箱
よと夜る夜中も厭はずかけ走る。これ如才
なき医者也、深切なる役人ハ馬も駕籠も捨て、
歩行はだしにもなり、民の為を思へば苦勞
大義もわすれはて、風雨寒暑の界もなく
世話のとどくを楽しみに思ふ人、誠に忠なる
役人とはいふなり。火燧に足をあたためて、病家
にて待兼るも思ひやらぬハ水くさき医者也。
頭痛疝氣を申立て願ひ裁許の延引するも
きのどくがらぬハ情なき役人なり。故に明君
賢相ハ人をしるを最上の智とし、誅賞に
怠り給はぬを急務とす。富る故に奢れば、
貧になるまで取上れば自然と奢ハやむと心
得たる役人ハ、聚斂殘賊の悪吏なり。食ふ故に
ふとり過れば断食させて肉をおとさんといふ
ハ下手医者也。奢るうちハ楽みなるやうなれ
ども、奢られぬやうになれば苦しき故におごら
るるうちに儉約をして、いつまでもたのしみを

失ふなど、教へ導く役人ハ公正忠貞の良吏なり。
食過ればふとり過て病氣の出る故に、食るる
うちより食をひかへて、いつまでも達者に病ぬ
やうにせよといふハ、上手医者也。此間毫毛の
違ひにて、君を仁君にすると、君を不君にする
とのわかれめなり。

花木の花末

○花木のはなを賞翫すれば、日除霜除をして虫を
とり鳥をおとして撫さすらぬばかりに大事にハ
すれ共、かんじんの根に土かひこやしをいるる道を
しらねバ色香の栄えを願へ共やがて枝葉も枯
花もすがれて、見事なりし一木もいつのまにかハ
薪となること、根に心をつけざりしあやまち也。
国用の盈虚家産の貧富も又然り。根を忘
れて枝葉の栄を望ミ願ふ心より、富を求むと
せしまにいつのまにかハ貧になりゆくこと也。

花木の花の栄えを願ハバ、根株に心をつくるを
専要とし、家国の富を願ハバ榮辱の実意を弁
へ、しるを基本とすべし。榮ハさかえと訓じて
美目なること也。辱ハはちと訓じて面目なきこと也。
美目なることハ賢愚貴賤となくすき好む道也。
面目なきことハ賢愚貴賤となく嫌ひ悪む道也。
但シミめを好めども美目の実意をしらず、辱を
きらへども辱の実意をしらず。故に富を失ひ
貧を招く。口惜きこと也。

美目と辱との実意ハ、おのれおのれの天分を
知るを美目とし、天分を忘るるをはちとす。
天分といふハ此世に生れたる程のものは、生れ
出るより貴賤それぞれの身の分限定りて上ハ
王侯貴人と生れ、下ハ農工商売と生れつき
たる分限なり。されバ此分限のうちにこころを
とりしめて、分限の外に心を取逃さぬやうにと
思ふ人ハ貴賤学不学によらず、げに尊とく
愛たき人也。又此分限の内に心を取しむることを
わすれ、分限の外に心を取逃したる人ハ、貴賤
学不学によらず、げに卑しく愛たからぬ人也。

愛たき徳をつむ人ハ栄え、愛たからぬ徳をつむ人は辱しめらる。天道の自然也。

分限の内に心を取しむると申ハ、先邦国の君と生れ給へるかたハ、下万民に敬ひ尊まれたまひて、生涯めでたき位に安じ給ふこと也。されバ敬ひ尊まれ給はんとてハ、先自己の苦樂ハ次にし給ひて、下万民の苦樂を第一に世話に思ひ給ふはずの天分也。此天分の内に心を取りしめ給ひて、朝夕に下の樂ミをたのしみ、下の苦ミを苦ミ給ひ、政教を慎ミ給ふ時ハ、万民其恩徳を慕ひ懐き

奉りて、千代万代も此君の愛たくあらせ給へとのみうたひことぶくこと、君の天分に応じて此上もなき美目なること也。もし此天分の美目を美目とし給はず、此外に美目を求め願ひ給ふ時ハ、美目を失ひ恥辱を招くこと也。ミめを求めて恥辱を招くと申ことハ、たとへバ宮室に金銀をちりばめ給ふハ美目を思ひ給ふしわざなれども民の草屋ハ雨露もりて、風日を凌ぐ便りなき時ハ、金殿の美しきを見るにつけても、一入奢侈のつよきを譏り、政のからきを恨ミ嘆く。その恥

いづくにか遁れ給ふべき。君の衣服に錦繡を重ね給ふハ美目を思ひ給ふしわざなれ共、民ハ布子の綿もなく、雪霜を忍ぶ便りなき時ハ、錦衣の美しきを見るにつけても、一入奢侈のつよきを譏り、政のからきを恨ミ歎く。其恥いづくにか遁れ給ふべき。君の食膳に八珍を備へ給ふは、甘味を好ミ給ふ故なれども、民ハ稗の飯にもあかず、飢餓を凌ぐ貯へなき時ハ、佳肴のうまきを見るにつけても、一入奢侈のつよきを譏り、政のからきを恨ミ歎く、其恥いづくにか遁れたまふべき。

君の出入に行装をかざり給ふハ、美目を好ミ給ふ故なれども、民ハ親子兄弟をすて、夫婦同居もならぬ時ハ、行装の立派を見るにつけても、一入奢侈のつよきをそしり、政のからきを恨ミ歎く。其恥いづくにか遁れ給ふべき。是栄えを願うて辱を招く。ミな天分を忘れて栄辱をとり違へ給ふ故也。君の宮殿ハ傾きたれども、民の家居ハ軒端ただしく、君の衣服ハ垢つきたれども、民の衣類ハあたたかに、君の食膳ハ水くさけれども、民の食物ハことかかず、君の行列ハ見苦しけれ共、民に

飢餓の患なくバ、是を見聞する人何をか譏り何をか笑はん。自国の民の懐くのミならず、他所他国の人までもうらやみ尊とミ奉らば、誠に天分のほまれ此上もなき美目といふべし。

天分を忘るるより栄辱を取違へ、辱まじきことをはぢて財用を費し、辱べき道をハぢずして財用を惜まず。国の衰敗するハ古今みな然り。

余處目ハいかばかり見苦しく共、内の備へ丈夫なれば、受持給ふ家國ハ子孫万世に伝へて、人に窺るべき氣遣ひなし。余處の人ハ不悦とも、

内の人ガ悦び慕ひ奉れば、何ひとつ辱べきことなし。是栄辱の分を明らかに弁へ給ふ故に、堪へ難きことをもこらへ給ひて、無益の費用に困しみ給ふ憂ひなし。されば國の富ハ是を基として得給ふべきこと也。

臣ハ君を以て心とすること自然の勢ひ也。故に君上の好ミ給ふ處は臣下令を待ずして行ひ、君上の嫌ひ給ふ處ハ臣下禁を待ずしてやむ。古今の鑑歴然たり。士は万石千石百石十石の身上も、是亦天分を弁へしりて、栄辱を取違へざれば、無益の

かざりに俸禄を費さず。身分相応の富を保ちて、分のたため貧窮に至らず。たとへばさねよき鎧を用意したるハ心懸よき士也。但し甲冑の修理は少金にて、一度すれば五年十年ハ物入なし。太刀刀ハ中身だにたしかなれば、子孫までも用前の害なし。衣服器用に立派を好めばその費過分にて、終身物好の止事なく、妻子の奉養不足なきを美目として、奉公の差支になるを恥ず。給使用する下女の多きを美目として、生死の場にて見続すべき侍若党を減省し、仲間小者の立廻りよきを美目として、日雇ひのものに弓槍を預ることはぢず。出入の町人に茶を振舞ふを美目として、知行の百姓の袖乞するを恥ず。衣服の垢つかぬを美目として、呉服商人に延引をわぶるを恥ず。かやうにかぞへミれば美目と恥との弁へ明らかならぬこといくバクといふ数もしらず。一生辛苦をして快樂なる心ハなく、窮鬼に責られて身を終ることは是非もなき次第なり。国ハ君臣栄辱を明らかに弁ふれば、財用満足の基本たつ。農工商賈ハ上に忠直の奉行頭をだに

たてて取扱ハすれば、上の好次第にうつりかはる物故に、君上のつとめハ榮辱を明らかに示して、善良の役人をえらミ給ふのミにて、鎖細なる役筋の末々までを察し給ふ道ハなし。兎にも角にも廉恥の道を正して財用の虚費を省き富を願はずして富に至り、貧を悪まずして貧をいづる政をたてたきものなり。

七年の病と見れば三年の艾を心懸ること、もどかしきことのやうに思ふハ今の世のみに非ず。しかしながら三年の艾を用意すれば、七年ハ病むはづ

の人も四年目にハ平癒すべし。もどかしとて用意せずバ、七年目にハ治し難き病と成べし。医者の治療のとどかぬに至る病人ハ、大体は不養生を止め人に多きもの也。

対某侯問書

以別紙申上候。老衰の儀手筆相乖キ、字形も不正、文言も前後仕り、重複多く、ケ條の次第も相調ひ不申、不敬の至奉恐入候。改書仕候て可奉入御覽筈ニ御座候得共、精神弱ク罷成、幾度も相認直し申候儀、甚以難儀ニ罷在候得ば、随意に筆記仕候までにて、差上申候事、何分ニも奉蒙御忍恕度奉存候。

一御国ニ学問所ヲ御造立被遊候御本意ハ、御先祖様よりの風俗ヲ失ひ不申、万人安堵仕候様ニ被遊度と申所極意にて、人を利口發明ニ被遊度と

申所にてハ無御座候。元来御国の旧風質実篤行にて、諸家ニ勝り申候事多く御座候。乍併太平式百年の恩化次第ニ奢靡逸楽ニ移り候処多く相成候付御政事も六ヶ敷罷成候處を御氣の毒ニ被思召候故ニ、学問と申事ヲ第一ニ御引立テ被遊候御事ニ御座候。学問を不仕候てハ人々我見我意のミにつのり候て、上の御仁徳と申所ヲ思ひめぐらし申事無之故ニ、其思ひめぐらし候心持の生じ候様ニと被思召候故ニ御座候。左候得ば御国の学風ハ先第一人情の質実ニ相成浮行虚飾の無之様ニ被遊度御儀と奉存候。但し

学問ヲ致シ候と申日ニハ、四書五経ヲよみ習ひ、夫より其義理ヲソロソロ弁へ候て、少々宛にても身ニ行ひ慣ひ申事ニ御座候。但シ書物ヲよみ習ひ候へば、自然とむかしむかしの事も相知レ、人のしらぬ道理もソロソロ合点参り、善悪邪正も弁別仕候様ニ相成候へバ、凡人ニハ勝レ知恵も開キ、口モキカレ、人ニも見コナシ不被申様ニ相成候事勿論ニ御座候。但シ此所より不覺自慢の心も生じ、我を高ぶり候事ニも移り申候事、是又自然の病氣ニ御座候。仍之善良の師長ヲ御立テ、其人の言行を見まね聞まね候様ニ被思召候て、師役を御立テ被遊候事ニ御座候。左候へば先ヅ師と相成候人、此所ヲ能心得可申事第一ニ御座候。扱人を教へ候ても百人が百人一樣ニハ不参もの、人心ハ各々別なる事ハ不及申上候。孔夫子三千の弟子七十人の親炙弟子達も、人々心慮も別段所行も殊異にて、尽ク一統ニハ相見不申候。乍併聖人の徳化にて、何レも善良君子ニ被相成、大ハ大小ハ小、ソレゾレニ世界ノ用ニ立ツ人計と相見申候。聖人の御徳ニテモ御一樣ニ教へ立テラレ候事ハ不相成ものかと可存候。併シ人が善良ニ相成候処ハ一同ニ御座候。一師長の人を教へ候事ハ、他国ハトモアレかくもあれ、

御国の御為ニなる様ニと申所肝要と奉存候。他家他国のまねをするなど御定め被置候事ハ、御先祖の深キ思召と奉存候。但し他所他国の風を学ぶなど被仰置候得ばとて、よその国の善事ヲするなど申候事ニハ有御座間敷候。余處の風ヲ致し候て、御国の人情にあはぬことはするなど申事ニ可有御座候。孝悌忠信仁義礼讓は何国にても人の悦ぶ道ニ御座候。但し富貴なる家にては被下物取扱ひもゆたかに御座候。貧乏なる国にては至て少く御座候。是も一樣ニならぬことと被存候。併シ学問を致し理義明かに相成候得バ、多少厚薄ハさのミ怨ミツラミもなく、一統ニ取扱の能キハ難有奉存候事、ソレガ学問を致し理義ヲ弁へ申候人の所得ニ御座候。此所ヲ弁へ候様ニ教へ可申事、師長の第一と奉存候。有教無類と被仰候かと奉存候。

一師長と申候へばとて、我計是非是非善キ事ハ不相成候。聖人万世の師といへども得不被成様ニ相見申候。但し人を教ユルものハ人と共々ニ善事ヲ致度、人と共々ニ悪事ハ不致様ニ心得申候て、教へ申度事と被存候。発明ものも愚鈍なるものも、御家中の人ニ御座候へバ、発明は発明文ニをしへ御用ニ立テ、愚鈍ハ

愚鈍丈ニ教へ戒て、刑辟ヲ受ヌやうにと申ことかと奉存候。

一人情ハ同を悦び不同ヲにくミ候事、無拋事に御座候得共其所を勉強して同異の論無之様ニと申

事衆人の師長の役ニ御座候。我好ム所ヲ膝ニ加へ、我

悪ム所ヲ淵ニおとしいるる様いたすハ、道德ヲ教ル人

任ニハ無之候。善ヲ賞し悪ヲ退ケ給ふことハ、人君

と大夫ノ職ニ御座候。其人君大夫不都合の事有之

候ハバ諷諫して何卒不都合無之様ニと、忠ヲ尽

し申ハ儒臣の職分ニ御座候。

一時ニ治乱あり、所施ニ宜所アリ。先第一心得可申事ニ

御座候。乱世と申ハ人の尊卑ニもよらず、続キ柄の親

疎ニもよらず、今日戦ニ勝チ我国ヲ強クスル人ヲあげ

用ユル事ニ御座候。治世と申ハ人々の尊卑分限ヒ

シト定リアリテ、我国が悪ひとて人の国へも行レズ、

トテモカクテモ君主の下知ニ随ひ不申候てハ、一日も

立ち不申候。分限ヲ超候事も、主君の御眼力次第

にて、下ニ属シ居候ても可恨事ハ不相成候。扱大夫ハ

大夫ニなり、士ハ士ニテ御奉公ヲ仕ルより外は無之候。

大夫ニ挙用仕給へバ、大夫の所作ヲ致し、士ニ被成候て

御用被成候得バ、士ニテ生涯をとなく相勤メ、心底

一杯ニ忠実を尽し可申事学問いたし候、人の安
樂なる所ニ御座候。是を弁別なく時ヲ恨ミ上ヲ
ソシル人ハ不良の人ニ御座候。其不良の人の沢山ニ
ならぬやうニ教へ導て遣し可申事、師の職分にニ
御座候。

一学館学生の業ハ四書五経を素読シテ、文字訓点

正敷よミ覚えさせ、次第ニ講釈を承り、ソロソロ義理ヲ
弁へ知リテ、チト宛も身行を習慣為致候て、其うち
奇特の者ヲ御褒メ可被遊事ニ御座候。詩文ヲ習ハセ
申ことハ、心情をのべ辞儀ヲシヲラシク作り覚え、無

風雅殺風景ニナラズ、其功ニより古今の治乱興廢、人
情ノ厚薄をも弁へ知べき遊散ニ御座候。上手ハ秀才、
下手ハ不才の差別迄にて、サノミ国政の利害ニハ与り
不申候。但し辞と申ものハ申様にて人心を感じ
候事妙なるものニ御座候得ば、善良の心ヲ長じ申様ニ
心得申度事ニ御座候。狂言妄語当座の遊戯と
心得申候得ば、利益ハ少く損害ハ多キことニ御座候。
損害と申ハ驕傲自負の心ヲ長ジ、詩ヲ作り文ヲ書キ
得ぬ人ハ人にて無之様ニ見下し候て、夫よりハ人の
詩文ヲホメソシリ候事が面白ク相成候時ハ、人の徳ヲ

損じ不計害ヲ生ジ申事、古今沢山ニ有之候。詩文ハ
心ニ思ふ所不申してハいられぬ人情ニ候得バ、其思ふ所
不好ら候得バ申出ス言葉も豪謾不敬多キものに
御座候。左候得バ上手もよし下手もあしからず、必竟
心の存する所真情ヲ取失ひ不申様ニと申所が、作者
の本意ニ御座候。左候得ば先々経書ヲ深切ニよみ、一句
一言にても、心ニ会得致し候事ヲ言ニ言ヒ、身ニ行ひ
候様ニ致度事ニ御座候。今日治世の分限ヲ忘レ、直に
むかしむかしの人のやうニなりたく存じ候は、万端ニ害
ヲ生じ申候。書ヲよみ申時ハ人の世ニ立チ死スル迄
無難ニ渡り可申、本文ハ紙一枚ニ幾所も記し有之候。
ソレヲ全ク身ニ行ひ言ニ出シ候ハ、賢人君子ニ候得共、
左様にはなられざることに候得ば、一ツ二ツ宛モいたし
習ひ言覚へ候て、君子ノ仲間ニ入り申度ことに御座候。
入テハ孝、出テハ悌とよミ覚へ申候得ば、不及迄も
是ヲ心がけ可申事、言忠信行篤敬と有之候得バ
不及迄も是ヲ守り可申事、ソレヲ不負所学（学フ所ニ負カズ）トハ
申候。書物ニテハ朝夕よミ候得共一向ニ言行ハ其所とは
違ひ申候てハ、尽ク学ぶ所ニ負キタル人にて、不良人ニ
御座候。此道理ヲ能ク弁へ可申事書生の業弁へサセ

申度が、師長の職分ニ御座候。

一身ニ分限の有之事ヲ弁へサセ不申候得ば、人々ノ

人欲ニテ人ヨリは尊くなり、人よりは富有ニナリ度もの

にて、いつか分限ヲ忘レ候より、不法不埒も出来り

学問の害夥敷、終ニハ身ヲ失ひ生を亡し候人も

有之事ニ御座候。所謂論語よミの論語しらずニ

ならぬやうニ、学度教へ度事ニ御座候。扱師長と

申者ハ、先人ニ信ゼラレ愛セラレズシテハ不参事ニ候。人ニ

信愛セラレ候得ば、悦服して畏敬ノ心も生じ申事

自然ニ御座候。人を悦服為致候事ハ、第一言語容貌

ヲ慎ミ可申事ニ候。溫柔敦厚ハ詩ノヲシヘナリと

有之候。詩を作り申人ハ此処を能心得可申事ニ

御座候。此場より詩ニ入候得ば、其人物モいつとなく

温和ニナルベキことニ御座候。我慢我執ツヨクナリ候ハ詩

のワキ道へ入りタル人ニ御座候。詩ヲ学ぶも文を作ルモ、

君子ノ所作ニ御座候。君子はイカナル人ヲ云フ、小人ハ

如何なる人を云フト申所ヲ弁へ、申度事ニ御座候。

人のよくなる様ニあしくならぬやうにと、古聖賢

名言を申残し置れ候て、其理義ヲさへ弁へ知り

候得ば、乍不及其通りニ不致してハならぬ事ニ御座候。

其理義ヲ弁へしるにハ、書物ヲよミ師の教ニ随ひ候より
出来候事にて御座候。ソレモ出来ヌハ書物をよまず
師の教ニ不随より生じたる不肖小人ニ御座候。君子
ノ多くなる様ニ、不肖小人のすくなる様ニと申
君上ノ御願望より、大勢人ヲ集メ候て、トモズレニスリ
アゲミガキ上度、夫故学問所ヲ御取立テ被遊たる事ニ
御座候。左候得ば学問所ヲ預り申役ハ、重役も下役も
扱々重キ職分ニ御座候と申所ヲ、心底ニ寸時も忘れ
申間敷は師長のツトメニ御座候。忠臣ハ出テ不申共、
不忠者ノ出ヌヤウニ、孝子ハ出ズトモ、不孝ものの出ぬ
やうニと心得候て、二年三年宛教化ヲいたし度
事ニ御座候。

一盛衰ハ物ノ常ニ御座候。盛ナレバトテ百年も二百年も
一様ニテハ立ヌこと古今歴然ニ御座候。併シ取扱方にて
十年が廿年、五十年が百年までハ持こたゆる
ものと相見申候。取扱あしけれバ火のもゆる様ニ
候得共、ビツシヨリト水ヲカケタルやうニ相成候。君子不窮
之業ヲハジメ候時ハ、まづ衰へたる時ハ如何様ニ可相成、
但しびつしよりとハきえぬ様と申所ヲ、最初ニ考へ
申度事ニ御座候。勝ても長追ひヲせず、甲の緒ヲ

シメ候事、古より名人の所作ニ御座候。君上御仁明ニ被為在、其御徳化次第ニ行届キ、御封内の人民孝悌力田ノ民モ次第ニ多く、扱御学館も次第ニ繁昌仕り、学問出精ノ人も多く相成事、可申上様もなき目出度御儀ニ奉存候。併シツラツラ相考え申候得ば最早只今の御政治此上も無之、御十分之御儀と奉存候。何卒世々子孫の御上迄も、かく有之度事ニ奉存候。御学問所狭く相成候ハバ、人を分チ講日ヲ分チ、如何様共人が納り候様ニ被遊度候。沢山なる時も一杯、不足なる時も一杯ニ相成候様ニ仕度候。敝邦にて明倫堂を造立仕候節、随分手広く致経営候得共、初て講ヲ開キ候日ハ、一統麻上下にて罷出候付、一向手せまにて納りかね、無扱老中の指図にて、堂の前後ニ敷物ヲ為致候て、尊卑を分チ、貴人ハ堂上、賤者ハ堂下ニ居並び申候テ講ヲ終り申候。老臣執政喜悦ニたへず、急ニ又々堂ヲ作り足し可申評議ニ御座候。其時愚老申談じ候ハ、忝事ニ御座候得共始終ハケ様ニハ無之事必定ニ御座候間、先暫増作ハ御止メ可被下候。貴賤の席を定メ、講日を分チ、上分ハ一月六度、中分ハ四度、下分ハ二度と相定メ申し度候。扱講日

出席は朝五ツ時ヲ以て定とし、五ツ時には学館の門を鎖し、たとひ大臣有司にても門より帰り候様ニ被成可被下候。左候得ば七八百人千人位ハ納り可申候。行々衰へ候ても、玄関の敷台へ子共の集り、手まりをつかぬやうニ御定メ被下度と申達し候得ば、尤なる事とて相止ミ申候。仍之いつ迄も堂ニ一杯ハ有之候。近年督学も三代目、人々の存慮も有之、信敬も薄く相成候得共、規則ハ私の立テ置候通にて、相応ニ人も出候て、学問所ハ依然と御座候。二度の積菜も急度有之、上の名代ハ爵位の老臣大役にて相勤メ申候。

先ヅケ様なるものニ御座候。学館せまく候とて、作り増作り増候てハ、限りも無之事にて可有御座候。

一 御学問所ヲ御立テ被遊候本意ハ、御国の人俗質実ヲ失ひ不申、浮虚ニならぬやうニと申所、肝要ニ御座候。大夫ハ大夫の道ヲ守り、士ハ士ノ職ヲ守り、上下貴賤一同ニ我国よりよき国ハ無之と存候様ニ致度候。他所他国への吹聴ハ、不埒の政なく不埒の罪民なき様ニと聞え候ハバ、無上の御儀と奉存候。百石ハ百石の入用千石ハ千石ノ入用、大きく申セバ国土は十万石は十万石、十五万石ハ十五万石、其上の事ハ不致事、扱ならぬ事ニ

御座候。浮虚の無之様、実行の多き様ニと教へ立テ申度候。其所ハ師長の教へ方、学生の学びかたニ有之候。追々学生輩ノ詩文も出精故ニ、沢山ニ伝見仕候、先日某が参り悦申候付、教方宜敷故ニかく迄詩人の出来の事、手柄至極の段称美遣し申候。其後参り候て、詩文沢山ニ持参仕り、是をある盛なる学館へ遣し、夫々の評ヲモ請ひ可申望申聞候付、可然とハ申候得共如何にも可然とも不存候付、又々参り候節は止申候て、先暫他へ遣し候事は見合可然趣申聞候得ば、成程と致承知罷歸り候。良工ハ人に示スニ璞ヲ以テセズト覺申候。至極上手感心ニたへぬ程ニテモ、非論ハ多き物ニ御座候。いまだ作り習ひの詩文大邦君子へも示シ申度と申ハ、最早浮靡なる心より起り申候。此浮虚の心情長ぜぬ様に致度候。先ヅ内輪にて得と熟し候ての上と申心が実心実情ニ御座候と、愚意ニハ存候より、右の通りニハ申聞候。

一大邦御政事ノ助ケと申ハ、人々実行を志し、虚飾ヲ恥ノ様ニ教へ申度候。報上の心ハ実行より出テ、競進ノ心ハ虚飾より生じ申候。人々分限ヲ弁へ今日を安ジ申候事、学問の所得ニ御座候。御学問所頭取の人物ハ、君上の御眼力ニ

有之事、大夫の取扱ニ有之事、三人にても五人にても、御入用程御挙用被遊候て相済可申、黜陟進退時宜に御随ひ被遊度候。唯々人々分限ヲ守り候様にと申處肝要ノ儀と奉存候。某生三年在塾、頭取ヲ為致置候處、実義篤心可看破事聊も無之候。始終調子の替ラヌ生得ニ御座候。外々もケ様ニ御座候ハバ学政ハ先御間も合ヒ可申かと奉存候。人々溫柔敦厚ニ相成、一同ニ相親愛相恭敬致して、異論異風ノ起ラヌ様ニ心得可申事、師長の極意ニ御座候と奉存候。以上。

初二申上候通老衰にて何是ぐどぐど仕り、手筆ハかなやらカタカナヤラ埒も無御座候。扱々不敬の至極実以奉恐入候。朝夕ヲハカリガタキ老衰の義、心程ニハ申取りも相叶不申、さりとは慚愧なることニ御座候。其所ハ千万蒙御恩恕、一ツにても御取用ニ相成候事ハ、御汲量被遊被下置候様ニ仕度奉存候。筆ニ随ひ候得ば、いか程申上候ても尽キ不申候得ば、先大略の所ヲ書記し奉入御覧候。大夫君子へ篤ト御評議被下度奉願候。以上。